

7日は「立秋」でした。早いもので 暦の上では もう 秋ですが 今日は 日本全国のあちこちで 35度以上を記録したそうです。まだまだ しばらくの間は 猛烈な残暑が続くそうなの頃です。まるで日替りで起こっているかのような 自然災害のニュースにも、何とも言いようのない不安と 得体の知れない不気味さを感じてしまいます。すべてを与えられて生かされていることを忘れた 人間の無責任と傲慢さに対する神様からの警告なのかと 心を痛めつつ 自らの生き方を振り返るとともに 被害に遭われた方々の上に 神様の平安がありますよう 引き続き 切にお祈り致します。

さて、先月号で紹介しました『ノートルダムの鐘』の著者 ヴィクトル・ユゴーの もう一つの有名な古典的名作『レ・ミゼラブル』(1862年 著)の 舞台を観る機会を 先日 与えられました。あの長編の原作が 美しい楽曲によって素晴らしく感動的なミュージカルとして 見事に演出され、世界中で 舞台化や映画化をされていることでも有名ですが、今年は 日本での上演 30 周年記念としても話題になり、永い間 多くの人に愛されている作品であることに改めて感銘を受けました。主人公ジャン・ヴァルジャンの波乱に満ちた生涯と 彼に関わる登場人物ひとりひとりの生き様を通して描かれている様々な価値観や 一つ一つの言葉は、はるか150年以上も昔に書かれたとは思えないような、作家ユゴーの慈しみに満ちた深い人間愛と切なる祈りが 現代を生きる私達にも 時を超えて伝わってきます。神様の愛の中で生かされている すべての人々の心の深淵に迫り来る 力強いメッセージが込められた物語だと 観る度に 新たな感動が心に湧いてきます。

自由を求め 革命に揺れ動く世の中で、ヴァルジャンは 貧しさの故 姪っ子のために パンを1つ 盗んだだけの罪でしたが、その間の脱獄罪も加わり19年間の牢獄生活を 課せられてしまいます。ようやく仮出獄を許されますが、胸につけられた囚人番号の焼印と 仮出獄の証明書は、前科者のレッテルとなり、世の中からは疎まれ 差別され、彼の心は暗闇に閉ざされていきます。そんな時 教会の司祭ミリエルと出会い、温かなもてなしと優しさに喜び、感謝したものの、その夜 教会の銀の食器を盗み 逃走してしまいますが、真夜中の街で すぐに捕まり、厳しい尋問の最中に 司祭ミリエルが現れ「彼に差し上げたものだ」と言い、その上 2つの高価な銀の燭台まで 手渡してくれたのでした。皆が去った後 司祭は祈りながら 彼に 優しく告げます。「私の愛する我が兄弟、今 あなたの魂は 私が 贖った。これからは正しく生きなさい。神様の祝福がありますように。」と。ひとりになったヴァルジャンは 初めて 涙と共に 自分自身の心と 対峙します。「泥棒し裏切り、汚く傲慢な こんな私なのに、あの人は “我が兄弟” と優しく呼び、銀の燭台まで与えてくれた。私は 赦されたのか？ 信じよう！これからの私の人生を 神様に献げて 新しく生きよう！それが 神様の御心なのだ」と赦された喜びと感謝に溢れ、新たな歩みへの決意を 声高らかに誓いました。この出来事をきっかけに、ヴァルジャンの人生は一変します。すべてに失望し 不信と怒りに塗れ 孤独で闇の中を 彷徨っていた彼は、司教を通して与えられた 神様の愛と赦しによって 自分への信頼に気づかされ、生きる希望と力を取り戻すのでした。その心の根底に育まれていた 神様への信仰は、年老いて 天国へ召される瞬間まで 安らかに彼の心を満たしました。神様の御心を求め 御手に委ねながら、人を愛し 人を赦し 人に尽くし 人のために生きる生涯へと変えられたのです。その 長い人生には、数々の出会いがあり たくさんの戦いがあり 数えきれない別離がありました。自らの命の幕が閉じられる時、命よりも大切に育ててきた 愛する娘コゼットへ遺していく言葉が 何よりも心に温かく沁みてきます。『誰かを愛することは、神様のおそばにいたことだ』原作では『愛し合うこと、この世にはそれ以上のものはない』と訳されています。「レ・ミゼラブル」とは “みじめな人々” という意味だそうですが、全編を通して感じられるのは、どんな人にも神様は 愛を注がれていること、人はその永遠の愛を信じることなのだ と ジャン・ヴァルジャンの生涯を見つめながら『人生最大の幸福とは、愛されていると確信することだ』という ユゴーの言葉を 改めて心に刻みつけたひと時でした。そして、平和を願い祈り想う この8月の日々、ゆったりと 優しく温かな時を過ごしなが、愛する子ども達ひとりひとりに どんな時も 守り支えてくださる 神様の大きな大きな愛を伝え それぞれの命の貴さを互いに分かち合いたいと 心から思いました。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしは あなたを 愛している。(イザヤ書43:4)」(石田 記)